



応用生態工学会ニュースレター
Ecology and Civil Engineering Society (ECESJ)

No.38

2007年(平成19年)12月20日(木)発行

〔発行所〕 応用生態工学会事務局 〒102-0083 東京都千代田区麹町 4-7-5 麹町ロイヤルビル 405号室

TEL:03-5216-8401 FAX:03-5216-8520 E-mail: ecas-manager@ecesj.com HP: http://www.ecesj.com/

〔発行者〕 応用生態工学会 (編集責任者: 幹事長 江崎保男, 事務局長 奥村興平)

Contents

1	はじめに	1
(1)	会長挨拶	1
(2)	幹事長挨拶	1
2	第11回大会報告	2
(1)	第11回総会報告	2
(2)	第11回大会を終えて	2
(3)	発表賞	5
(3)	懇親会	7
3	理事会・幹事会の報告	7
4	委員会報告	8
(1)	普及委員会	8
(2)	拡大編集委員会	8
5	行事報告	9
(1)	平成19年度札幌セミナー報告	9
(2)	東京地域活動開始	11
6	新刊の案内	11
7	編集後記	12

はありませんが、今回は前回よりは多数の会員の承認によって、役員が決まったと思います。関連学会との提携につきましては、いよいよ来年の九州の福岡大学で開催される大会が、「日本景観生態学会」「日本緑化工学会」との3者合同開催にこぎつけました。さらに、幹事会は幹事長を中心に積極的に動いてくれています。

甘い採点をすれば、公約はまあまあ順調に果たされ始めているといえましょう。会員の皆様方ますますのご協力をお願い申し上げます。

研究について、ひと言付け加えさせていただくならば、内容は応用生態工学らしいものがたくさん出てきたと感じます。これからの10年は、国際化に向けて堅実に歩むときだと思います。それにはまず、LEEの購読と、英文論文の投稿を会員の皆様に強く呼びかけたいと思います。どうかよろしくお願い申し上げます。

1 はじめに

(1) 会長挨拶

第6期会長 山岸 哲((財)山階鳥類研究所)



二年前に、広瀬前会長より、本学会の会長職を引き継いでから、早いもので、二年間が過ぎました。

このたび名古屋大学で開催された第11回大会で会長に再選されたわけですが、前回の会長就任時の公約を振り返ってみたいと思います。それは、1) 選挙制度の改正、2) 関連学会との提携、3) 幹事会の活性化、の三つだったと思います。

選挙制度は完全なオープン選挙になったわけで

(2) 幹事長挨拶

第6期幹事長 江崎保男

(兵庫県立大学/人と自然の博物館)



先の2年間に引き続き幹事長の大役を仰せつかることになりました。思い起こせば、この間の最大の重要

事は、2006年秋の10周年記念大会でした。そして、大会実行委員の方々にほぼすべてを任せつても、気がかりだったのは、10周年記念シンポジウム「土木工学と生態学の壁はとりのぞかれたか？」が成功するか否でした。その成果は、すでに会員の皆様のお手許に届いているはずの、応用生態工学の10巻1号にすべて盛り込まれており、これに

対する評価は今後なされると思いますが、もしもこの試みが成功したとすれば、それは応用生態工学会の実力がこの10年間に着実に蓄積された証といえましょう。理事会では、次のステップにむけて、すでに準備がなされています。会員の皆様には、このことを楽しみにしていただき、引き続き応用生態工学の発展のためにご尽力いただくようお願いいたします。私も微力ながら精一杯努めたいと思います。

2 第11回大会報告

(1) 第11回総会報告

事務局長 奥村興平

平成19年9月16日(日)16時30分～17時

20分に第11回総会を開催しました。まず、冒頭で愛知工業大学准教授内田臣一氏が総会議長に選出され、議事進行が行われました。以下に主要事項の報告を行います。

1) 報告事項

平成18年度の活動報告として、一般経過、会員状況、実施工事、理事会・委員会等の会議、会誌編集状況などについての報告が江崎幹事長から行われ、承認されました。

2) 決議事項

平成18年度の事業報告と決算報告が江崎幹事長から、監査報告が田畑監事から行われ、原案どおり可決されました。続いて平成19年度の事業計画および予算案について幹事長から説明が行われ、原案どおり可決されました。

また、「事務局の移転について」(第2条)規約の改正が幹事長から提案、説明され、原案通り可決されました。

さらに、本総会では、規約に基づき役員の改選が行われ、次の新役員が選任されました。

選出されたのは以下の方々です。紙面の関係でご所属のみ記載します。

会長：山岸 哲 ((財)山階鳥類研究所長)

副会長3名 =50音順=

近藤 徹 ((社)日本河川協会会長)

辻本 哲郎 (名古屋大学教授)

森下 郁子 ((社)淡水生物研究所長)

理事12名 =50音順=

荒井 秋晴 (九州歯科大学講師)

大村 達夫 (東北大学教授)

沖野 外輝夫 (信州大学教授)

奥田 重俊 (横浜国立大学名誉教授)

角野 康郎 (神戸大学教授)

竹村 公太郎 ((財)リバーフロント整備センター理事長)

中村 太士 (北海道大学大学院教授)

春田 章博 ((株)環境・グリーンエンジニア取締役)

古川 整治 (水計画研究所)

間宮 清 (応用地質(株)代表取締役社長)

森 誠一 (岐阜経済大学教授)

山本 晃一 ((財)河川環境管理財団研究所長)

監事2名 =50音順=

小林 光 ((財)自然環境研究センター上級職員)

中村 哲己 ((株)建設技術研究所)

幹事長：江崎 保男 (兵庫県立大学教授)

副幹事長：熊野 可文 (利根川歴史研究会)

幹事14名 =50音順=

浅見 和弘 (応用地質(株))

内田 朝子 (豊田市矢作川研究所)

小俣 篤 (国土交通省河川局河川環境課)

風間 ふたば (山梨大学准教授)

鎌田 磨人 (徳島大学准教授)

萱場 祐一 ((独)土木研究所自然共生センター長)

清水 義彦 (群馬大学准教授)

角 哲也 (京都大学准教授)

関根 雅彦 (山口大学教授)

高野 安二 ((財)ダム水源地環境整備センター)

西 浩司 (いであ(株)国土環境研究所)

星野 義延 (東京農工大学准教授)

細見 正明 (東京農工大学教授)

山本 民次 (広島大学教授)

(2) 第11回大会を終えて

大会実行委員 田代 喬(名古屋大学 助教)

(本稿は「河川」(社団法人日本河川協会発行)に寄稿した報告を協会の許可を得て1部変更して再掲したものです。：事務局)

〈はじめに〉

応用生態工学会第11回大会は、平成19年9月15日～17日の3日間にわたって、名古屋大学

を会場として執り行われた。東京で実施されることの多い、応用生態工学会の大会としては、九州国際大学(北九州市)で開催された第7回大会以来、4年ぶりとなる地方開催である。

大会運営に当たった実行委員を代表して、辻本哲郎実行委員長(名古屋大学、学会副会長)らとともにホスト的立場にあった著者が、大会開催内容について報告する

〈研究発表会〉

発表数は、前回の第10回記念大会(81件)を上回る83件であり、学会発足時から続いている増加傾向を保持するものであった。なお、本大会では、講演申込時のタイトルとアブストラクトの内容に応じたプログラム編成がなされ、14のセッション(口頭発表:5、ポスター発表:9)が設定された。スケジュールの時間的制約もあって、口頭発表20件とやや限られた件数になったが、ポスター発表(63件)では、終始活発な議論が繰り広げられる盛況ぶりであり、本学会の特色として定着してきたものと思われる。

テーマとしては、河川を始めとする水域を対象フィールドとしたものが多く、以前からの傾向とほぼ同様であった。しかし、生態現象の解明を目的とする従来の基礎研究以外に、生態系のアセスメント手法の提案、モニタリングの効率化に繋がる計測技術の紹介、生態系修復の取り組みに関する報告など、実践的な研究の占める割合は多く、応用生態工学会ならではの研究スタイルが確立しつつあるように思われた。

会期中の総会終了後に、一般投票と選考委員会によるポスター発表賞の表彰が行われた。ポスター発表に対する投票者の意見には、研究のクオリティが高い発表が多かったと評価する声が出る一方で、2時間という発表時間では不十分との指摘もあった。時間的制約がある中で、増加し続ける発表申込に対して、どのようなプログラム編成で対応するか、次回大会以降に宿題として課された。

〈伊勢湾流域圏ミニシンポジウム ～自然共生に向けて～〉

戸田祐嗣氏(名古屋大学)の司会進行の元、辻本実行委員長、木幡邦男氏(国立環境研究所)、野崎健太郎氏(椋山女学園大学)による話題提供

があった。辻本実行委員長と木幡氏が、科学技術振興調整費の「伊勢湾流域圏の自然共生型流域管理技術開発」プロジェクトの紹介とそこでの取り組み・成果を発表した一方、野崎氏は、流域圏における山間地の社会システムに焦点を当て、環境教育の側面から自然共生という概念について考察した。このほか、演者の一人として予定されていた清野聡子氏(東京大学)は、生態学、人文社会学的な視点を取り込みながら、伊勢湾流域圏における比較流域論を展開されるはずだったが、西南日本に接近中の台風11号の影響により、残念ながら欠席となった。

野崎氏と欠席された清野氏を除いては、「伊勢湾流域圏の自然共生型流域管理技術開発」プロジェクトのメンバーであることから、全体討論でも流域圏の環境を(典型的特徴を有する)類型景観の集合体として捉え、自然共生に関する判断基準として生態系サービスに着目する研究アプローチについての議論に多くの時間が割かれた。主要構成メンバーには、生態学の専門家がいなくてもあって、特に、生態学側からの厳しいコメント、批判も聞かれたが、発言者の思想・哲学が垣間見られるやり取りがあり、概ね、盛況であったように思われる。生態学と土木工学の相互理解が進んでいなかった、かつての応用生態工学会に通じる懐かしい部分も感じられたが、工学側からの新たなアプローチが提示されたことに加え、野崎氏の実践的な環境教育の取り組みが示されるなど、今後の新たな展開に期待を感じさせる内容であった。



伊勢湾流域圏ミニシンポジウム

～自然共生に向けて～

〈公開シンポジウム

「生命の水を人と生物はいかに分かちあうか?」

水資源問題に関する研究の第一人者である、サンドラ・ポステル氏 (Global Water Policy Project 理事) をアメリカ合衆国より招聘し、「Rivers for Life: Managing Water for People and Nature (生命の川: 生命の水を人と生物はいかに分かちあうか)」と題して基調講演いただくとともに、大森浩二氏 (愛媛大学沿岸環境科学研究センター)、藤田光一氏 (国土交通省国土技術政策総合研究所) の話題提供を交えながら、辻本実行委員長の司会進行により、実施された。なお、本シンポジウムは、ポステル氏の著書「Rivers for Life (講演題目と同名)」を翻訳して日本に紹介した、山岸哲会長 (山階鳥類研究所)・辻本実行委員長の強い希望に基づく企画により実現したものである。

ポステル氏の講演は、現在、世界的に直面している水資源問題の現状、米国や南アフリカ共和国における水資源政策、企業における水資源確保への取り組みなどを紹介しながら、人間と自然が分かち合うことによって、河川の健全な流況・水利用を保全することの重要性を強調するものであった。これに対し、大森氏からは、個体群の存続可能性の観点から、河川の流量を制御するダム・堰堤が生物に与える影響について、分析事例を交えた報告が、藤田氏からは、本会場の位置する名古屋に因み、伊勢湾流域圏の典型的な河川とその流域の背景と実状を整理した上で、適正な流量確保に向けた問題点について報告があった。

パネルディスカッションでは、水管理という人間の生活と密接に関連した問題の性質上、学術と実践の隔たりなど、困難な問題提起もあったが、



公開シンポジウム

～生命の水を人と生物はいかに分かちあうか?～

不確実性も内包する水資源管理に向けて、持続可能な閾値というものを認識する必要性が見出されたほか、日本と米国など、それぞれの国や地域に応じた特徴がある中でも、管理のためのコンセプトの共有は可能であり、情報交換することの重要性が確認された。これまでの学会における議論の多くが、「場」を対象としたものだったこともあり、水の「量」を対象とした議論は新鮮だったように思われる。

〈パートナーシップ分科会

「矢作川『郷土力を培うために』を求めて」

本学会パートナーシップ委員会委員長の森誠一氏 (岐阜経済大学) の企画により、開催された。一般講演申込からの2件の発表を含む7件の話題提供があり、新見幾男氏 (矢作川漁業協同組合)、三浦盛雄氏 (国土交通省矢作ダム管理所)、洲崎燈子氏 (豊田市矢作川研究所)、裕さくら氏 (矢作川「川会議」)、本守真人氏 (近自然工法研究会、元愛知県) を交えて、森委員長の進行のもと総合議論が行われた。

ダム・堰堤が多く建設されているにもかかわらず、自然豊かな矢作川を対象として、管理者としての矢作川の捉え方、漁業協同組合の「天然アユ」回復の試み、研究者・市民が協働した水源となる森の健康診断、川を楽しみ、利用しながら保全しようとする「川会議」における活動など、川に関わって暮らす人々の活発な行動が紹介された。「郷土力」というキーワードが表すように、多方面にわたる元気な人々の協働が織り成すコミュニティーの存在は、河川管理の在り方を考える上で示唆に富んだ会合であったと思われる。

前日までと会場が異なったにもかかわらず、地域住民の方々や学生を含む、多様な方々が参加された中での開催となり、森委員長曰く「交流の場」として、通常の研究発表会にはない特徴を感じさせる分科会であった。今回が初めての試みであったが、次回以降の展開が期待される場所である。

〈エクスカージョン: 矢作川〉

地方開催時の通例として企画されているエクスカージョンは、パートナーシップ分科会に引き続き、矢作川をテーマに、内田臣一氏 (愛知工業大学) の企画、前出の新見氏、裕氏に加え、四俵正俊氏 (愛知工業大学)、内田朝子幹事・山本敏哉

氏(豊田市矢作川研究所)ら各氏からの現地説明により、実施された。なお、参加者(バスの都合により30名上限)は、説明者を除き23名であった。



パートナーシップ分科会

～矢作川「郷土力を培うために」を求めて～

分科会終了後、車中にての矢作川流域の地質・地形・利水等の背景的な説明に引き続き、岡崎市の葵大橋(河口より32km)付近にある最大のアユ産卵場、最大の利水施設である明治用水頭首工(同35km)、治水上の重要ポイントである鶴の首狭窄部(明治用水頭首工上流部)、千石公園(同39km)における河畔林整備の見学など、矢作川流域の現状を半日で把握できる充実した内容であった。なお、研究上のコアスポットでもある古川水辺公園では、カワヒバリ貝に関する現地説明に引き続き、豊田市矢作川研究所関連では、恒例行事となっている「アユの食べ比べ大会」が催され、大いに好評を博したようである。

(おわりに)

本大会は、例年と異なる名古屋での開催であったため、地域色を出すことをひとつの目標に掲げたものの、準備・運営に関しては不慣れな点が多く、参加者各位には行き届かない点多々あったかと思われるが、ご容赦願えれば幸いである。

(3) 発表賞(ポスター賞報告)

平成19年9月16日(日)、大会2日目に名古屋大学IB電子情報館の1Fプレゼンテーションスペースで行われた第11回研究発表会ポスター発表には、62点が参加し、

ポスター賞： 一般投票部門賞 3点
選考委員会賞 4点

が選考された。

1) 受賞ポスター

〈一般投票部門賞〉

① セッション10 水量・水質・水循環

No.10-8 タイトル 「絶滅危惧藻類チスジノリの生息適地を最大化する流量の推定」

発表者 三橋弘宗(兵庫県立大学自然・環境科学研究所)、関基(八千代エンジニアリング(株)、堀江史生(同)、瀧健太郎(株環境総合テクノス)、渡辺秀之(同)、浜野直樹(兵庫県上郡土木事務所)、大澤剛士(神戸大学発達科学部)、道奥康二(神戸大学工学研究科)

② セッション9 植生

No.9-7 タイトル 「樹林化と堆積した砂及びリターの関係」

発表者 坂本健太郎(株建設技術研究所)、関根秀明(同)、小池直行(同)、武田秀佑(埼玉大学大学院理工学研究科)、浅枝隆(同)

③ セッション12 ダムの影響

No.12-7 タイトル 「支川流入によるダム下流生態系の改善：支川の規模と流入地点による比較」

発表者 片野泉((独)土木研究所自然共生研究センター)、土居秀幸(愛媛大学農学部)、皆川朋子((独)土木研究所自然共生研究センター)、根岸淳二郎(同)、秋野淳一(同)、萱場祐一(同)

〈選考委員会賞〉

・Aチーム(セッション11+10:生態系調査・評価+水環境)

タイトル 「絶滅危惧藻類チスジノリの生息適地を最大化する流量の推定」

発表者 三橋弘宗(兵庫県立大学自然・環境科学研究所)、他
(本ポスターは一般投票部門賞も受賞)

・Bチーム(セッション8+9:砂洲・底質+植生)

タイトル 「美々川上流域における樹林分布の違いが出現種構成に与える影響」

発表者 福間博史(日本データサービス(株)、斉藤諭(同)、志田祐一郎(北海道大学農学院森林・緑地管理学講座)、片岡勝裕(北海道室蘭土木現業所苫小牧出張所)、中村繁人(同)、柳井清治(北海道工業大学環境デザ

イン学科)

- ・ Cチーム (6+7+13: 魚+鳥)
 タイトル 「魚の河川落差部分の通過しやすさ
 の評価手法の開発に関する研究」
 発表者 野口浩幸 (山口大学大学院)、
 関根雅彦 (同)、今井剛 (同)、
 樋口隆哉 (同)、浮田正夫 (同名誉教授)
- ・ Dチーム (12+14: ダムの影響+底生動物)
 タイトル 「ダム下流河川における魚類採餌活
 動に対するフラッシュ放流の効果」
 発表者 大杉奉功 ((財)ダム水源地環境整備セ
 ンター)、熊澤一正 (応用地質株)、浅見
 和弘 (同)、矢沢賢一 (国土交通省三春ダ
 ム管理所)



ポスター発表～ポスター賞審査発表・表彰式～

2) 選考方法

ポスター賞の選考方法は、昨年度と同様に「一般投票部門賞」を3点、「選考委員会賞」を4点とした。

「一般投票部門賞」は全ポスターを対象として、当日の参加者の一般投票によるもので、得票数の多い上位3点を選考委員会確認のもと選考した。

「選考委員会賞」は、選考委員を下記4チームに分け、各々の部門での受賞者を選考委員会で決めた。

- Aチーム (セッション 10+11: 生態系調査・評価+水環境)
- Bチーム (セッション 8+9: 砂洲・底質+植生)
- Cチーム (セッション 6+7+13: 魚+鳥)
- Dチーム (セッション 12+14: ダムの影響+底生動物)

「一般投票部門賞」3点と「選考委員賞」4点、計7点であるが、今回1点が両賞を受賞し計6点

となった。

今回のポスター発表には、1分間プレゼンテーションの大講義室およびポスター発表会場への参加者は200名を越え、一般投票数は延べ108票(投票人数は5~60名)であった。

3) 講評

各ポスターの評価内容については、各発表者にお知らせするとして、選考委員会における今回のポスター発表の全体的な講評は以下のとおりである。

- 発表内容について
 - ・ 全体に内容のレベルが高い。
 - ・ 今後のその研究の進展が期待できそうな発表が多くなった。
 - ・ 実践で使いそうな研究が増えてきた。
 - ・ 農学系の課題が増えたり、いろいろな分野の課題を一同に見ることで面白かった。
 - ・ デザインを含め内容の分かりやすいポスターが増えたが、今後もポスター発表の表現力に磨きをかけてもらいたい。
- ポスター発表の運営について
 - ・ 1分間プレゼンテーションがあるのは良かった。
 - ・ ポスターの点数が増え、全部見て回るのは困難。2時間の実質発表時間では短い。
 - ・ ポスターの発表数及び参加者数が多くなって来たことから、会場を広くとるなど改善する必要がある。

を創り上げて行くことが望ましいなどの意見・提案があった。

(4) 懇親会

片貝武史(名古屋大学)

懇親会は矢作川研究所の内田朝子さんが中心となって事前準備を進めていただきました。当日の準備は矢作川研究所洲崎さん、白金さんも加わり、矢作川研究所の皆様にご購入いただいた愛知の名産品を飾りつけていただき、地域ポスターのレイアウト等の準備をしていただきました。

懇親会は洲崎さんの司会のもと口火が切られ、挨拶も程ほどに参加者皆さんはほろ酔い気分で、親睦を深めつつも愛知県の名産品コーナーに並べられた地酒、酒肴からデザートに魅了され、名産

品コーナーは人ばかりで、あっという間に無くなりました。やはり地元の方に地の名産を購入していただいたおかげだと改めて思いました。

懇親会開始からやや遅れてサンドラポステルさん、世話役の相良さん、尾花さんが会場に入られ、改めてサンドラさんにスピーチをしていただきました。急遽「生命の水」の即売会が設けられ、サンドラさん、辻本先生にサインをお願いする一幕もあり、懇親会として、楽しく、美味しく、大会の記念となるサプライズもあり、非常に盛り上がりました。

当日は雨が降り、湿気と参加者の熱気で会場の空調は効かず、蒸し風呂状態であったが、本当に大勢の方に参加していただいたおかげで、盛況のうちに終えることができました。



懇親会

サンドラポステルさんと談笑する川那部名誉会員

3 理事会・幹事会報告

第39回理事会(第6期) 議事録

<議事次第>

- ・ 日時：平成19年9月16日 17:30～18:00
- ・ 場所：名古屋大学 7号館
- ・ 出席者：山岸会長、近藤副会長、辻本副会長、森下副会長、荒井理事、沖野理事、中村理事、春田理事、古川理事、間宮理事、小林監事、中村監事、江崎幹事長 (記録:事務局 奥村)

<議事内容>

1. 会長挨拶

設立後10年間の活動の成果を礎に、第11回名

古屋大会から新たな発展を目指すための活動を開始した。応用生態工学会の運営について大所高所から協力願いたいとの挨拶があった。

2. 新役員自己紹介

3. 審議事項

(1) 副幹事長

幹事会では、副幹事長として熊野幹事を推薦することが決まり、理事会において承認され会長により任命された。

(2) 委員会

理事会では、平成19年度の各委員会の委員長の留任が議決され、会長から委嘱された(なお、委員については一部調整が必要であり後日随時委嘱する)。任期は2ヶ年とし第13回総会(平成21年度)までとする(ただし、交流委員会と会誌編集委員会の委員長は平成18年1月着任なので任期についてはあらためて調整する)。併せて、会長から各委員会の担当理事の依頼が行われた。

普及委員会

委員長 竹門 康弘(京都大学)

担当理事 辻本 哲郎(名古屋大学)

交流委員会

委員長(理事) 中村 太士(北海道大学)

会誌編集委員会

委員長 浅枝 隆(埼玉大学)

担当理事 角野 康郎(神戸大学)

パートナーシップ委員会

委員長(理事) 森 誠一(岐阜経済大学)

情報サービス委員会

委員長 高橋剛一郎(富山県立大学)

担当理事 古川 整治(水計画研究所)

将来構想委員会

委員長 谷田一三(大阪府立大学)

担当理事 沖野外輝夫(信州大学)

(3) ICLEE理事会

理事会において、韓国で開催される2007年のICLEE理事会に谷田副会長が山岸会長の代理として出席することが決められた。

(4) 3学会合同大会

理事会において、平成20年度の大会は3学会(応用生態工学会、日本緑化工学会、日本景観生態学会)合同で九州において開催する予定であることが確認された。

4 委員会報告

(1) 普及委員会

〈次第〉

- ・日時：平成19年9月15日(土) 12-14時
- ・場所：名古屋大学 工学部 705号室
- ・出席者：
 - 竹門(委員長)、関根、星野(担当幹事)
 - 橋本、細井、古川、原田、若尾(記録)(委員)

〈議事内容〉

1) ポスター案の決定

- ・ 澤委員が作成したポスター案3種を用いて議論した。
- ・ ポスター案は、最もシンプルなパターン(ポスター作成提案をした細井委員が最初に提案したスタイル)が良いと判断された。
- ・ 今後、以下の改良が必要であるとの意見があった。
 - 河川工学者だけでなく、生態学者(可児藤吉)を掲載すること。
 - 掲載する写真を増やすこと(最近の事例、学会が対象とする事項が視覚的に分かる風景や生物、河川だけに偏らないもの、希少生物分布の遷移マップなど)

2) 継続審議事項

i) 地域研究会の組織化について

- ・ 相談役と協議の上、より魅力あるイベント開催を目指す。
- ・ 地域の企業や団体との協同体制を確立して行く。
- ・ 普及活動の空白地帯をなくすることを提案する。
- ・ 2年に1回、地域行事を開催することを目標に、地域研究会の組織を強化する。
- ・ 2年に1回、ワークショップをもち、東北全県での開催を目指す。

〈意見交換〉

- ・ 静岡県での普及活動を推進するために、地元のコンサルタントや静岡大学に働きかけを行うことが必要である(竹門委員長)。
 - ・ 中国地方では、中国山地が生物地理学的にユニークであり、ここをテーマとした、普及活動を考えてみてはどうか(竹門委員長)。
- ii) 各地区から提案される全国レベル事項の受け皿について

- ・ パートナーシップ委員会と連携し市民団体との交流、協同を模索する。

iii) HPの普及委員会のコンテンツ

- ・ 過去に開催したイベントに関する資料(アーカイブ)掲載、学会と関わりの深い活動をしている団体のホームページ紹介などを行う。

3) 新規審議事項

10周年の成果を踏まえて、竹門委員長から「生態誌研究会(仮称)」設立の提案があった。この提案について議論を行った結果、出席した委員は、本取り組みに賛同した。

(2) 拡大編集委員会

〈次第〉

日時：平成19年9月15日(土) 12-13時半

場所：名古屋大学 IB 電子情報館

出席者：谷田(担当理事)、浅枝(委員長)、

五十嵐、鎌田、長崎、中坪、藤田(委員)

〈議事内容〉

1) 論文投稿状況について

論文投稿総数は、年による変動はあるものの、順調であり問題はない。ただし、土木系の投稿が極めて少ない。

また、査読の期間が長期化する傾向にあり、短縮を図る必要がある。

2) 平成19年度発行予定について

平成19年度発行予定の、Vol.10、No.1(10周年記念特集号)、No.2の目次が示され、No.1、No.2共に印刷の工程に回されていることが報告され、発刊にあたっては同時に送付する旨が諮られ、承認された。

3) 論文投稿支援について

十分なデータがあるにも関わらず論文の投稿ができない人に対する、論文投稿支援システムについて議論がなされた。論文が投稿されたものの十分な執筆がなされていないものについては、編集委員会で対策を考えること、また、論文にできない人に対しては、NPO 応用生態工学研究会を通じて、支援策を考えることになった。

4) J-Stage 及び CiNii の登録について

継続して進めていくことになった。ただし、各号が J-Stage に掲載された後、完全論文のダウンロードを行える時期の設定については、幹事会の

意見を聞くことになった。(同日18時より開催された幹事会において、アブストラクトについては各号のJ-Stage掲載時にダウンロード可能とすること、完全論文のダウンロードについては、J-Stage掲載後1年を経過した後よりダウンロードを可能にすることになった。)

5) その他

i) 論文査読期間の短縮および担当編集委員による論文執筆指導を容易にするために、論文投稿後の扱いについて、以下のように変更することが議論された。現在、論文が投稿された後、担当編集委員から提出される修正依頼等すべての事項は編集委員長経由で行われている。しかし、このシステムは論文修正の依頼・指導、査読期間を短縮させることに適したシステムではない。そこで、論文受理の連絡は編集委員長から行うもの、その後の過程は担当編集委員の判断において行うこととし、編集委員長は、担当編集委員から提出される報告を著者に連絡するというしくみを検討することになった。

ii) 論文の編集業務が大きな負荷になっている状況を踏まえ、担当編集委員の数を、魚類、水生昆虫、植物の分野において各1名ずつ増やすことが決められた。

iii) 土木出身者の論文投稿先が土木関連学会に偏っており、応用生態工学への投稿が極めて少ない。土木関連学会の投稿先等との切分けを考える必要があることから、土木学会河川部会での議論を期待することになった。

5 行事報告

(1)平成19年度札幌セミナー 報告

応用生態工学会札幌 岩瀬晴夫

応用生態工学会札幌は、(独法)寒地土木研究所と(財)河川環境管理財団北海道事務所との共催で2007(H19)年8月27~28日に、セミナーを実施しました。参加者数は現地60名、室内が90名でした。

セミナーのテーマは、「本来の川を取り戻すために…その3. 土砂の流れがつくる“多自然川づくり”」です。本来の川を取り戻す技術上の最新知見を求め、2005年からはじめたシリーズも、今年で3回目になりました。一日目の8月27日(12:00~20:00)は、旭川から新篠津(札幌か

ら30km)に向う道中にある石狩川水系雨竜川(妹背牛町付近)と暑寒別川(増毛町)での現地セミナー。二日目の28日(9:30~17:00)は、5人の講師の講演を、二人の司会者(小樽商大の山本充教授、寒地土研の渡辺康元首席研究員)に進行していただいた室内セミナーでした。

●現地セミナー

現地セミナーの始発は旭川空港です。はじめからトラブル発生。木下良作講師の飛行機到着が1時間遅れとのこと。段取り変えをして、大型バスは旭川空港を予定より20分遅れで出発。途中、JR旭川駅集合の参加者を乗せ、雨竜川の視察地に移動しました。ここは、おおきな蛇行部(延長4km)を直線化(2kmにショウトカット)した現場です。直線化で残された旧川蛇行部への分水及び環境変化(例えば分水量がない場合の水質悪化等)の状況などを見て、分水部が川の発達で閉塞されている川原に降り立ち、体感してもらいました。

次に向うバスの中で、池田宏講師から、周辺の堆積地形(ドロの川)と暑寒別川の河川争奪地形についての説明を聞いている間に、暑寒別川が見えてきました。ここで木下講師と合流。暑寒別川は河口まで急流(勾配1/50~1/90)が続く、谷底河川です。流下能力向上のため改修しましたが、改修による掃流力増大に備え、河床礫(多くは一抱えから人頭大の石)の移動抑制を意図し、流下方向60m毎に、大石組み(大石の直径は2m前後)の帯工を設置しました。しかし、2年間の融雪出



現地セミナー(雨竜川)

水と小洪水で、流心部の大石組みは全て破壊、流失。改修直後の河床から2m以上の河床低下が生じました。サケ・マス其自然産卵できる暑寒別川でした

が、産卵に必要な河床礫が流失してしまい、そこにあるのは露出した岩盤河床が続く現実です。自然の猛威で改変された署寒別川の河相に唖然とするばかりです。このような状況下で、なにを間違ったのか、なにが有効な対策だったのか、今後なにが可能なのだろうか。そこが問われる現場でした。

宿に着くまでのバス車中では、各講師から現地をみたコメントと、若干の質疑応答がありました。到着が遅れたので、休む間もなく懇親会、そして二次会へと移行しました。

●室内セミナー

開会に先立ち、総合司会・永山滋也さん(北大博士課程)の紹介で、応用生態工学会普及委員会竹門康弘委員長の本学会説明があり、(財)河川環境管理財団北海道事務所鈴木俊行所長のあいさつで開会です。セミナー司会者(山本充、渡辺康元)の自己紹介後、最初の講演は、本会の中村太士代表がセミナー趣旨説明をかねつつ、「はじめに…物理現象と生物生存の必然性」と題したテーマです。「たまたま生物がそこにいるのではない。そこにいる必然性がある(物理現象)にあるのだ。だから、その場がかけがえのない場である認識を持ってもらいたい」と、河畔林動態の事例をまじえた語らいでした。二人目の木下良作講師からは、「ADP(超音波流速計)による洪水時の流れ構造の解明」という題で、いま現在の研究成果をまじえ、洪水時に同時に起こっている河床変動時の三次元流速の最新情報を話していただきました。また、川づくりの観点から、堤防法線・低水路河岸法線・流心線の各々における蛇行線形ピーク点のずれを設ける事が大切だと強調されました。

ここで昼食の休憩です。

午後は、3人目の山本晃一講師からです。テーマは「沖積河川地形の構造とその変動」でした。さりげなく一言、「(その人が)背中に背負っているもので、(川の)見方が違う」と。私が背負っているものは?と自問しながら、講演を聴いていました。

4人目は昨年に続き池田宏講師。テーマは「山地河川の地形変化…岩川から石川へ、石川から岩川へ…」。岩と石では石の方が強い場合が多い、などユニークな視点で分かりやすく説明する池田節。昨年以上の馬力全開で、勢いと笑いあいの講演でした。最後の5人目は、長谷川和義講師で、上流から下流まで全体をカバーした、「山地部・沖積部に

おける種々の流れ形態とハビタット」の講演です。講演の中で、木下良作講師が戦後まもなく日本から世界に発信した蛇行論の一部がスクリーンに写し出し、木下講師に敬意を表されました。あらためて、木下講師が書かれた、科学技術庁資源局資料第36号「石狩川河道変遷調査」(昭和36年11月)を後日読み、蛇行の原点がちりばめられていることを再認識しました(ちなみに木下講師は大正14年生まれ、現在も現地での観測を行い、研究を継続中)。

5人の講演の終了後は、講師全員が前列にならび、質疑応答の時間です。治水・利水・環境(生物)をばらばらにではなく、総合化を目指した編集力とそれを支えるデータ整備力をつける必要性。そのことが本来の川を取り戻す遠くて近い道であるが分かりました。しかし、それを誰が(どこの組織が)担うのか? データのベース化は、更新も含めたシステムづくりと制度づくりに、まだまだ時間を要することでしょう。



室内セミナー(質疑応答)

最後に寒地土木研究所寒地水圏研究グループの吉井厚志グループリーダーからセミナー総括をかねたあいさつがあり、散会となりました。

あわただしい終わり方でしたが、参加され方が、なにかを感じてくれたセミナーであったことを願いつつ、無事終了したことを報告いたします。

「謝辞」

現地セミナーでは、雨竜川と署寒別川の資料提供・現地説明していただいた北海道開発局石狩川開発建設部北空知河川事務所ならびに北海道留萌土木現業所事業課にこの場をお借りして感謝申し上げます。

(2) 東京地域活動開始

高橋和也 (東京地域責任者)

応用生態工学会では、発足当初より学会全体の活動を実施するとともに、全国の各地域が主体となり地域ごとの事例(現場)や地域特性を背景として、それぞれ独自の活動を行ってきました。このような地域独自の活動は、現在では、札幌、仙台、北陸(新潟、富山、金沢)、名古屋、大阪、広島、福岡で行われています。

東京・関東では、多くの事例(現場)を抱えながら、事務局が東京にあることから学会本体の活動を行うだけで、独自の活動を行ってきませんでした。また、このような活動組織すら存在しませんでした。昨年(2006年)の10周年記念大会時に、有志により『応用生態工学会東京』を立ち上げました。活動内容や組織形態はこれからつくり上げて行くといことで、「まずは、行動を起そう!」と、11月27日に(財)ダム水源地環境整備センターの会議室をお借りして、第1回目の勉強会を開催しました。



当日は、アナウンスから開催まで2週間程度の時間しかありませんでしたが、30名弱の方が集まってくださいました。勉強会では、村上さん(日本工営株)、西さん(いであ株)、高橋さん((財)水資源機構)の3名の方から話題提供いただき、埼玉大学の浅枝先生に座長を引き受けていただき、質疑応答や議論が進められました。多くの方から質問やコメントがあり、あっという間に予定の時間が過ぎてしまったという印象です。勉強会のあと、会の進め方についても議論しましたが、「研究内容を皆で議論し、論文執筆への一助とする場にしたい」、「保全対策や調査結果等について紹介し、その評価について皆で議論してもらいたい」、「現場視察を含め、現場での活動内容を交換しあう場にしたい」と勉強会に対するさまざまな意見・要望がでました。今後も、アンケート

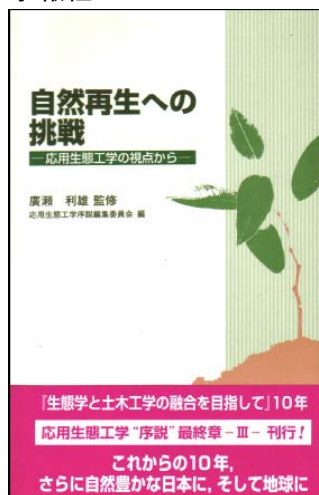
等で会員からの意見を募り、実りある勉強会へと発展させていきたいと考えています。会員および関係者、関係機関の参加と御協力をお願いします。

プログラム

- ・19:00 開会
- ・発表・質疑応答 座長：浅枝隆(埼玉大)
- ・19:00~19:40：話題1、2
 - RHSを用いた物理環境調査と環境診断(I)
 - ーリファレンスとの乖離度による評価ー
 - 村上 まり恵(日本工営株)
 - RHSを用いた物理環境調査と環境診断(II)
 - ー乖離度による評価と生物との関係ー
 - 西 浩司(いであ株)
- ・19:40~20:10：話題3
 - ダム試験湛水開始以降に発生したヒゲナガカワトビケラの優占と流下物
 - 高橋 陽一((財)水資源協会)
- ・20:10~20:30 自由討論
 - 話題1、2に関する討論の続き
 - 今後の応用生態工学会(東京)の活動について
- ・20:30 閉会

6 新刊の案内

「自然再生への挑戦ー応用生態工学の視点からー」
 監修・廣瀬 利雄/応用生態工学序説編集委員会・
 編刊行/平成19年12月5日 220ページ
 定価：3,675円(税込) /送料別◇申込先：(株)
 学報社 ISBN978-4-904079-00-3 C3051



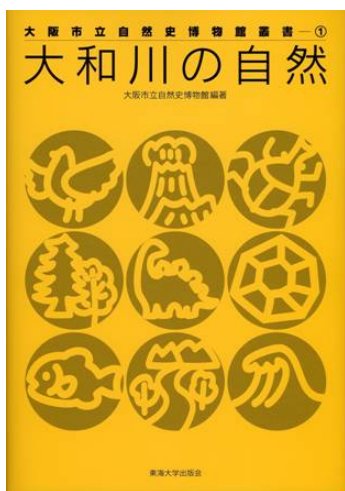
本書は、「応用生態工学序説ー生態学と土木工学の融合を目指して」(1997)及びその増補版(1999)に続くものである。最初の版が世に出てから約10年が経過し、1997年に設立された応用生態工学研究会も2002年に応用生態工学会となった。この間、「環境」に対する考え方も大きく変化してきた。(中略)応用生態工学の目指すべきものは何かを議論し、それに基づいて様々な事例を見つめなおすことは意義があると考え、その結果を本書にまとめることを企画した。過去10年の集大成ではなく、次の10年に向けて

どのような課題があるか、われわれはどのように取り組んでいけばよいかの議論の土台になることを意図したつもりである。特に、今後応用生態工学においても中心的な課題となる、自然再生や環境管理に関連する内容を多く盛り込んだ。

<“まえがき”より抜粋>

「大和川の自然」

大阪市立自然史博物館編著(東海大学出版会)、
定価 2940 円(税込) 2007 年 06 月 20 日刊行
ISBN978-4-486-01767-7 C1340 156 頁 A5判



奈良県と大阪府にまたがって流れる一級河川大和川といえば、毎年発表される水質調査全国ワースト5の常連で、水の汚れた川の代表と受け止められている。確かに大和川はその大半が市街地の中を流れており、自然を語る川では

ないように思われるかもしれない。しかし、大阪市立自然史博物館の学芸員と友の会のメンバーを中心とした約150人が「大和川水系調査グループ・プロジェクトY」として立ち上がった。本書は、プロジェクトYのメンバーが足かけ4年間にわたって大和川の源流から河口までの環境と生物を調べ上げた成果のまとめである。支流も含め全水系を隈無く調べてみると、人間活動や外来種の侵入によって生物相が貧弱になっている場所だけでなく、多くの生き物が残っている場所が見つかるものだ。大和川は「きたない」だけの川ではないことがわかってくる。

第2章から3章にわたり、特徴的な観察ポイントの状況や、確認された主な生きものの生息・生育状況がわかりやすく解説されている。生物調査は魚類、両生類から貝類や水生昆虫の動物群と植物に及ぶが、それぞれの分類群の専門家が調査の核になっているだけに信頼性が高い。そこに参加した多数のメンバーのマンパワーが加わって、水系の隅々にわたる詳細な実態が明らかになった。その結果は各種の分布図に如実に現れている。この分布図は貴重で、外来種の広がりが見える一方、

まだメダカはいろいろな所に残っていることもわかる。種によって明らかな分布パターンがあることにも気付く。今後の環境保全の取り組みのための貴重な資料になるだろう。

4章以降では、大和川水系の生物を脅かす要因を整理するとともに、人と大和川との関わりについてもふり返っている。人間活動とともに存在してきたと言える大和川の自然を考える上で、このような側面を正しく評価することは不可欠なことである。

プロジェクトYは、今までその自然が顧みられることのなかった大和川の水質や生き物の実態を調査し、さまざまな自然が残っている「意外な結果」を示すとともに、川が直面しているさまざまな問題も浮き彫りにした。このように詳しい調査が「きたない」ことで有名な川で行われ、一つの川がもつさまざまな側面を明らかにしたという先例は、河川調査の一つのあり方を示すものとしてたいへん参考になる。その核となった博物館の役割、社会から言えば博物館の活用とも言えようか、そのような視点からも注目される出版物である。

(理事：角野康郎)

7 編集後記

平成19年(猪年)も師走を迎えました。第11回名古屋大会を大過なく終えることが出来、関係各位の皆様には大変お世話になり感謝しております。

研究発表など活発な活動の効果でしょうか、今年度は75名(12月10日時点)の方に入会いただきました。また、バックナンバーの購入申込31件(延べ60冊)、研究発表会講演集の購入申込40冊など、当学会への関心の高さを実感しております。

応用生態工学会が後援する行事が数多く開催されていることもあり、今後益々当学会の研究成果や取組への情報提供の要望が増すような予感がします。会員各位のご指導・ご支援をいただき要望に応えて生きたいと思っておりますので宜しくお願いいたします。

(事務局:奥村興平)

[平成19年12月10日現在会員数]

名誉・正・学生会員	1,230名
賛助会員	41法人(63口)